

阿含・ニカーヤにおける現観

金 敬 姫

はじめに

現観 (abhisamaya) は「認識 (見ること)」「理解」「さとり」の意味で用いられ¹⁾、涅槃に至るための一つの修行道である。涅槃に至る流れが確定した最初の段階が預流である。預流に入る方法には三宝に対する不壊の浄信によるものと、法の現観によるものがある。その中、現観による場合は法眼が生じ、三結 (有身見・疑・戒禁取) を断じ最初の聖者位にあたる預流になる。本論では阿含・ニカーヤにおいて現観という語がどのような文脈で用いられているのか、現観の対象である法と、それによって得られるものについて留意しながら検討をすすめる。その結果、現観の対象になる法には (1) 縁起 (十二支各支)、(2) 四聖諦、(3) 五蘊があるということを明らかにしたい。

1. 阿含・ニカーヤにおける現観の用例

縁起法 現観の対象になる諸法としてまず、十二支縁起の観察がある。『律蔵』Mahāvagga に初夜・中夜・後夜、十二支縁起を順に逆に観察した後、次のように覚ったとされる。

実に、熱心に瞑想しているバラモンに諸法が明らかになる時、その時、彼にとってすべての疑いは消滅する。なぜなら、因を有する法を知るから。(Vin I, p.2.3-6)

以上の感興偈は初夜に縁起を順に逆に観察した後に語られたものであるが、中夜・後夜にも感興偈が語られている。中夜・後夜の感興偈のうち、前 2 句は初夜のものと同ーだが、後 2 句は異なる。まず、第一の感興偈の中、「諸法が明らかになる」という場合の「諸法 (dhammā)」は、「無明を原因にして諸行が生じる」といわれるように十二支各支がそれに相当するのであり、「因を有する法 (sahetudhamma)」を意味する。そして、中夜の感興偈の「[[彼は] 諸縁の滅を知ったからである」という一節から、因を有する諸法は滅するものであり、苦の消滅を意味していることがわかる²⁾。このような縁起の観察は過去七仏の縁起観察も

同様である。例えば、『相応部』Mahā-Sakyamuni-Gotama³⁾では、世尊がまだ正覚以前、十二支各支を対象とした根源的な思惟と智慧から現観が、順観（流転門）と逆観（還滅門）に苦の生起と消滅の過程において起こっている⁴⁾。以上、現観の対象となる諸法は十二支各支であり、それらは因を有し滅するものであるということがわかる。

四聖諦法 上述の因を有する法が滅するという事は四聖諦に対する現観とも関連するものである。四聖諦の現観に対する用例は、例えば、『相応部』Kulaputta⁵⁾において確認される。ここで、過去・現在・未来の善男子たちは四聖諦を現観するために出家すると説かれている。四聖諦の場合、現観の対象となる諸法は苦とその原因である渴愛だけではなく、渴愛の滅（涅槃）や八正道も含まれている。ブツダは四聖諦の三転十二行相を伴う如実知見により無上正等覚を覚ったと語っている⁶⁾。それを聞いた五比丘に法眼が生じたのである。以上、四聖諦を十二通りに観察することが解脱につながることであり、因を有する苦はその因がなくなるにつれて滅するという点から、縁起の道理に基づいていることがわかる。

五蘊法 五蘊に対する現観の用例として『相応部』Puppha⁷⁾では如来が世間法である五蘊それぞれを現観するということが語られている。五蘊を無常・苦・無我であると見る実践は『律蔵』の「無我相経」がよく知られている。五蘊は執着の対象にされたとき五取蘊であり、有身とも言われる⁸⁾。いわゆる、五蘊それぞれに対して「我がもの」「我れ自身」「我がアートマン」というように「我」「我所」として執着することである。自己に対する執着が苦の生起につながることは『相応部』Patipadāにおいて見られる⁹⁾。そこでは十二縁起の順観と逆観の考え方に基づき、有身の生起と消滅について説かれている。つまり、有身の生起の原因と消滅は渴愛と渴愛の滅であると述べられている¹⁰⁾。以上、五蘊一つ一つは十二支縁起のように「縁已生法」である。五蘊を無常・苦・無我であると観ずることは縁起を観ずることであり、このことは、『相応部』Attadīpaにおいて、「五蘊が無常・苦・変易法であると知る比丘は苦の原因が消滅し涅槃に達する者である¹¹⁾」と説かれていることから理解できる。

2. 現観することによって何が得られるのか

以上、十二支縁起・四聖諦・五蘊が現観の対象であることが確認できた。それらは有為なる諸法であり、その性質が因を有し滅するものである。これは、「初転法輪」で、五比丘に生じた「生起するいかなる法も、すべて、それは滅する法である¹²⁾」という法眼の内容でもある。ここで、法の現観は法眼を得ることで

あるということが理解できる。次にその法眼とは何かについて考察したい。

法眼の内容 「初転法輪」においてブッダが初めて五比丘に説いたのは苦楽中道である。ここで、「中道は眼と智を生ずるもの、涅槃のために資するもの¹³⁾」として説かれている。これは「智慧の眼」であり¹⁴⁾、中道によって生ずる法眼であることが考えられる。苦楽中道は「正見」をはじめとする八正道であり、「正見」は四聖諦に対する智 (ñāṇa) として定義される¹⁵⁾。一方、『相応部』Kaccāyanagotta では、次のように説かれている。

カッチャーヤナよ、実に、この世界は大概、手段・取著・執着に束縛されている。しかし、ある者はこの手段・取著である、心が固執すること、すなわち、執着の習性に近づかず、とらわれず、「わたしのアートマンである¹⁶⁾」と主張しない。まさに、「苦が生ずるときに生ずると（見る）苦が滅するときに滅すると（見る）」疑わず、惑わず、他〔者の考え〕によらないことより、ここに彼にはほかならぬ智が生ずる。カッチャーヤナよ、まさに、この限りのものが正見である。カッチャーヤナよ、「一切がある」というこれは第一の極端である。「一切がない」というこれは第二の極端である。カッチャーヤナよ、如来はこれら二つの極端に近づかずして、中によって法を説く。(SN II, p.17.14-24)

ここで、「正見」は生と滅を如実知見することから生じる智である。「一切が有るという見解」と「一切が無いという見解」から離れる中道であると十二支縁起をもって説明している。『相応部』Channa¹⁷⁾においては、阿難から迦旃延の有無中道説を聞いた闍陀が「法を現観した」といわれる箇所は漢訳では法眼を得たと説かれている。以上、「中によって法を説く」と言うとき、「中」の内容は縁起、すなわち、正見であることが確認できた。そして、縁起をもって説明される正見は四聖諦に対する智として定義されることから、縁起と四聖諦の要点は同じものであり、それが法眼の内容であると考えられる。

現観することは預流になること 以上、諸法に対する現観は、法眼を得ることであることについて考察してみた。ここで、法眼を得るということは預流になったことを意味する。以下、預流について考察してみよう。

『長部』Mahāli-sutta では、預流は「三結を断ずることから、預流者であり、墮法しない者、決定している者、三菩提に赴く者¹⁸⁾」と説かれている。ここで、ブッダゴーサは「預流者というのは、道の流れに入った者となる¹⁹⁾」と注釈していることから、三結を断ずることは預流者であり、法の流れに入るのは、初めて涅槃への道の流れに入ることであると確認される²⁰⁾。『中部』Sabbāsava-sutta では、三結は「見所断の諸煩惱である²¹⁾」と説かれ、ブッダゴーサの注釈によると初めて涅槃を見る預流道であることがわかる²²⁾。

(200)

阿含・ニカーヤにおける現観（金）

以上、現観することは預流になることが確認される。このことは『相応部』Yamaka と Ānanda 両經典において、「法が現観された」という箇所は、漢訳では法眼を得たといわれる。さらにブツダゴーサは預流者が生まれたと注釈している²³⁾。このことから、法が現観されたということは法眼を得たこと、すなわち、預流になったことであると考えられる。また、三結の断は法眼を得ることを意味する。『増支部』Lonaphala-vagga では、次のように説かれている。

比丘たちよ、まさに、このように、聖なる弟子には塵を遠ざけ、垢を離れる法眼が生じたことから、比丘たちよ、見ることの生起と共に、聖なる弟子には三結、すなわち、有身見・疑・戒禁取が断じられる。さらに、また、二法である貪と瞋から脱する。彼は欲望の対象から、まさに離れて、不善法から離れて、有尋であり、有伺であり、遠離から生ずる喜樂を有する初禪を成就して住する。比丘たちよ、その時がくれば、聖なる弟子は死ぬであろう。〔しかし〕結と結ばれている聖なる弟子が、再び、この世界（欲界）に戻って来るようなその結は存在しない。(AN 3 I, p.242.20-29)

ここで、法眼が生じたということは、見るが生ずることであり、それによって三結が断じられることを意味するのである。このことは、「一切漏経」の記述と一脈通じるところがあると考えられる。そこではブツダゴーサは「見ることは、預流道である」と注釈している。一方、ここでは、法眼と見る事が同じ意味で用いられているのは、「四聖諦法を把握する預流道の眼である²⁴⁾」と注釈されていることから理解できる。以上、見ることによって三結が断じられたということから、後の教義学における見道説の起源を確認することができる。

おわりに

以上、現観の対象になる法には (1) 縁起 (十二支各支)、(2) 四聖諦、(3) 五蘊があり、縁によって生じた諸法に対する現観があることが確認できた。まず、現観の対象である十二支各支は「因を有する法」である。それ故、生起するものは消滅するものであることを示すのである。そして、五蘊も縁起の原理に基づいている。このように諸法の性質に対する正しい理解によって法眼が得られる。これは縁起をもって説明される「正見」であり、四聖諦に対する智でもある。法眼を得たというのは三結を断じ預流位に入ることから、現観することは法眼を得ることであり、預流に入ることであることが確認できた。

1) 現観 (abhisamaya) という語は、阿含・ニカーヤにおいては動詞 abhi-sam-eti, 及び abhi-sam-bodha, abhi-sam-bujjhati, pajānāti という語形が代わりに使用される場合や、これらの語形と共に用いられることがある。水野 [1961: 52], Frauwallner [1995: 183] 参照。

2) Vin I, p.2.15-16. 松本 [1989: 61-65], 村上 [2006: 77-78]. 3) SN 12.10 II, p.10.

4) 十二支縁起各支に対する現観以外、十支縁起各支に対する現観については『相応部』Nagara 及び『長部』Mahāpadāna-suttanta がある。SN 12.65 II, pp.104–105, DN 14.3 II, pp.30–35. 5) SN 56.3 V, p.415. 6) Vin 2a6. I, p.11. 7) SN 22.94 III, p.139. 8) SN 22.105 III, p.159, MN 41.44 I, p.299. 有身 (sakkāya) は自身 (svakāya) ともいわれる。語義解釈に関しては今西順吉「我と無我」『印度哲学仏教学』1, 1986, pp.28–43 が詳しい。9) SN 22.44 III, pp.43–44. 10) SN 22.105 III, p.59, MN 41.44 I, p.299. 11) SN 22.43 III, pp.42–43. 12) Vin 2a6. I, p.11: *yam kiñci samudayadhammam sabbam tam nirodhadhamman ti.* 13) Vin 2a6. I, p.10. 14) Vin A V, p.965. 15) DN 14.22 II, pp.311–312. 16) SN 22.90 III, p.135 に従う。17) SN 22.90 III, p.135, 『雑阿含』(261) (T2, No.99, p.67a). 18) DN 1.6 I, p.156. 19) DA I, p.313. 20) SN 12.27 I, p.43, SN 12.28 II, p.45 などでは、「法の流れに入ったもの (dhammasotam samāpanno)」と説かれている。ブッダゴースは、「法の流れはほかならぬ道と呼ばれる」(SA II, p.59) と注釈している。21) MN 1.2 I, p.9. 22) MA I, p.74. 23) SN 22.85 III, p.112, 『雑阿含』(104) (T2, No.99, p.31b), SA II, p.310, SN 22.83 III, p.106, 『雑阿含』(261) (T2, No.99, p.66b), SA II, p.308. 24) AA II, p.356.

〈略号および参照文献〉

AA *ĀṅguttaranikāyaAṭṭhakathā (Manorathapūranī)*, M. Walleser and H. Kopp (ed.), PTS vol. II, London, 1930.
 AN *Āṅguttaranikāya*, R. Morris (ed.), A. K. Warder (rev.), PTS vol. I, London, 1885.
 DA *DīghanikāyaAṭṭhakathā (Sumaṅgalavilāsini)*, W. Stede (ed.), PTS vol. II, London, 1931.
 DN *Dīghanikāya*, T. W. Rhys Davids and J. E. Carpenter (ed.), PTS vol. II, London, 1903.
 MA *MajjhimanikāyaAṭṭhakathā (Papañcasūdanī)*, J. H. Woods and D. Kosambi (ed.), PTS vol. I, London, 1932.
 MN *Majjhimanikāya*, V. Trenckner (ed.), PTS vol. I, London, 1888.
 SA *SamyuttanikāyaAṭṭhakathā (Sāratthappakāsini)*, F. L. Woodward (ed.), PTS vol. II, London, 1932.
 SN *Samyuttanikāya*, L. Feer (ed.), PTS vol. II, III, V, London, 1888–1890.
 Vin A *VinayapīṭakaAṭṭhakathā (Samantapāsādikā)*, J. Takakusu, M. Nagai (ed.), PTS vol. V, London, 1966.
 Vin *Vinayapīṭaka*, H. Oldenberg (ed.), PTS vol. I, rep. London/Oxford, 1929.
 T 『大正新脩大藏經』大正新脩大藏經刊行会, 1924–1932.
 Frauwallner. E. “Abhidharma-Studien” WZKSO, Band, VII, 1963, Band VIII, 1964. Eng. tr. By Sophie Francis Kidd, *Studies in Abhidharma Literature and the Origins of Buddhist Philosophical Systems*, New York, 1995. 松本史朗「縁起について」『縁起と空—如来蔵思想批判—』1989, 大蔵出版。水野弘元「Abhisamaya (現観) について」『東海仏教』7, 1961, pp.50–58. 村上真完「〈諸法考〉—dhamma の原意の探求と再構築— (1) 諸法と縁起」, 『佛教研究』34, 2006, pp.63–133.

〈キーワード〉 現観, 有為法, 法眼, 預流

(大谷大学大学院)